
らき すたSS ~ 普通が普通で普通じゃない~

ゆーみん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

らき すたSS ー普通が普通で普通じゃないー

【Nコード】

N3766BA

【作者名】

ゆーみん

【あらすじ】

これは陵桜学園高等部に転入してきた平沢剣輔ひらさわけんすけがいつもの四人+αと出会い、友情、愛情、根性その他諸々を育んでいく物語です。

前日談（前書き）

初めに

オリジナル主人公、オリジナルキャラが許せない人はオススメしません。（おそらくたくさんでてるので）

更新は一、二日でやっていきたいです。

パロディー多数登場します。

原作を知っている方がキャラクターの印象がわかりやすいと思います。

以上が平気な方は下のまえがきすっ飛ばして、本編に行っても大丈夫ですよ。

初めまして、ゆーみんです。

本編はオリ主がだいたいの原作登場キャラと交じり合っていく物語です。

自分ではかなり長くなる予定でいます。

おがましいのですが、もしこの作品が面白いなと思った方はこれからよろしく願います。

毎度ですが、駄文乱文なんでもありな文章力なので、そこはスルーするか、そこはかとなく指摘してくれると幸いです。

末永く、温かく見守ってやってください。

前日談

前日談

この話は俺 - 平沢^{ひらさわ} 剣輔^{けんすけ}が長らく世話になった実家をはなれて父親方の祖父の家に越して来たところから始まる……。

高校二年生の春

親の都合で埼玉県幸手町にある祖父の家へ引越して来た平沢剣輔は、早速明日から入学が決まった陵桜学園高等部の真新しい制服（と言っても学ランだが）を袋から出し、一年間お世話になった高校の制服を丁寧にクローゼットにしまっていた。あらかた引越しの荷物の整理は出来ており、後は明日の準備を残すだけになっている。

「明日から新しい学校かあ……。」「

前の高校では入学してそうそうに興味の合う友達ができ、それなり充実したものだったためか新しい学校で友達ができるか正直のところ不安だった。

それは必ずしも彼に限ったことではないのだが。

実際、陵桜学園の高等部は一学年が13ものクラスで構成されているマンモス校なので、もともとから学園に通う生徒でも、二年目も同じクラスになる人なんてほんの数人だろう。

それでも剣輔は不安を拭いきれなかった。

もちろんそれは彼の趣味のせいでもあるが。

「とりあえずこんなところかな。」「

ひとしきり準備が整ったところで剣輔は立ち上がり仏壇のある和室へと足を運んだ。

「じいちゃん、ばあちゃん、明日から新しい学校だけど俺頑張ってくるから。」「

懐かしい祖父母の顔に合掌をし自室へ戻っていった。

まだ寝るには早い時間だったので、本を読んで過ごし、今宵も夜が更ける。

午前1時誰もいないはずの平沢家の廊下に足音が響いた。

そして、リビングにあたる場所で、電灯以外の何かを点ける音が聞こえた。

前日談（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございました。
もちろん、早く続きを更新したい所存であります。

ロングランになると思いますが、頑張ってゴールを目指していき
たいです！。

四月十日 前編

平沢剣輔の朝は早い。いつものように六時半には起き、朝飯の仕度をする。学園まで電車で少なくとも四十分はかかるからだ。

前の学校では家が遠く、電車もあまり通っていなかった。なので必然的に朝早く起きることになっていた。慣れていると言えば慣れているのだろう。

「それにしても眠いなあ。やっぱ録画すればよかったかなー。」

上ではぼやきを口に出しているが、フライパンを持つ手は止まらない。剣輔の両親は朝早く、夜遅い生活だったので朝昼晩は自分で調達せねばならず、家事はそれなりにやっていた。やらざるをえなかっただけなのだが、ここでも彼の一年間で身につけたスキルを存分に發揮し、家事を進めていった。

七時二十分、いそいそと家の鍵を閉め、少し早歩きで家を後にする。剣輔の家は最寄りの駅から程よく近いところがあるので急ぐ必要はないのである。しかし転校初日で気持ちが高ぶるのは当然なのだ。

定期を使い電車に乗り込む。少し早い時間だったので学園の生徒はまばらだった。

そのまま電車に揺られること四十分。

その間剣輔は自己紹介のセリフを考えていた。

「はじめまして、愛知県から来ました。平沢剣輔です。幸手市の祖父の実家から電車でここまで来ました。この高校の第一印象はなんというか、大きいですね。」

（いかにいかに、堅苦し過ぎるな。）

「はじめまして、平沢剣輔って言いまーす。愛知県から来ましたー。まだ土地勘となくてー不安いっぱいですけど頑張ってなれていきたいです。」

（初対面なのに馴れ馴れし過ぎる！！！！）

そんなことを考えているうちに目的の駅に着いてしまった。

学校までの道のりはすでに調査済みなので迷うことなく舗装された道を歩いた。

ほかの生徒も剣輔と同じ気持ちなのかどこか急ぎ足だ。

「あの…すみませんですが。」

突然後ろから声をかけられた。しかもその人が今から赴こうとする学校の制服を着ていた訳で、二倍びっくりした。

「はい！！なんでしょうか！！！」

思わず大声になってしまい相手の方は少し肩を揺らしていた。

「あの…生徒手帳落とされましたよ…？」

剣輔は声の主をようやく視界に収めることができた。

（か、かわいい…）

不覚にも少しときめいてしまった。

その女子生徒は大きな丸めがねをかけていて、見るからに頭の良さそうな雰囲気漂っている。

「あ、あの…。」

「あつ、す、すいません！」

見るからに真っ赤になった顔でその女子生徒が言葉を紡いだ。なんだかんだでその子の顔をたつぷり五秒は見つめてしまった訳で。

「その…生徒手帳を…。」

「あつあ、ありがとうございます。」

剣輔はようやくその少女が何の目的で話し掛けてきたのか悟った。

「そ、それでは失礼します。」

そう言い残すと、その女子生徒は駆け足に去っていった。

（かわいい人だったなあ）

登校初日からご機嫌な気分ですつきまでの不安が嘘のようだ。

「あつこれ。」

件の少女が走っていった方向の地面に何か落ちていた。

「これって…。」

さっきの少女の生徒手帳であった。

名前のところには

高良 みゆき

とあり、クラスは2ー4 と記入されていた。

（さっきの子のだ。また後で届けに行こう。）

そっ心に決め、目的地陵桜学園を目指すために一歩足を踏み出した。

四月十日 後編

「まいったなあ」

平沢剣輔は早速迷ってしまった。

道のりはすでに調べてあったので、大丈夫だったが、学校に入ってからのはさっぱりだったのだ。

剣輔自身人見知りしない方なのだが、さすがにだれかに聞くという選択肢は少し厳しかった。

そんな調子で校庭内をぐるぐるしていると、後ろからまた、声をかけられた。

「あつ、またどうかされたのですか？」

声をかけてきたのは朝出会ったあの高良みゆきという女子生徒だ。

「お、あつあ、朝の時はどうもありがとうございます。」

「いえいえ、お気になさらずに。」

「あの、それでどうかされました？」

ハッと我に帰った剣輔は自分の今の状況を高良みゆきにこう伝えた。

「あのー俺今日から転校してきたんすよ、それで職員室に寄りたいんですけどそれがわからなくて。」

女性に話しかけられたこと自体少なく、受け答えもかなりあやしい気がするがここでは割愛しよう。

「そうだったんですか。職員室ならこの正面玄関を回ったところにありますよ。」

「あ、ありがとう。」

「みゆきいー?!」

遠くから高良さんと呼ぶ声がした。

それに気がついた高良さんは、「今行きますよー。」と返す。

（案外おっとりしてる人なのかなー）

高良みゆきについて個人の感想をつぶやいていた剣輔だが、高良さ

んの「それではこれで。またご縁があればお会いしましょう。」の言葉で我に帰り、先程心に決めたことを復唱した。

「あの高良さん、これ落としましたよ。」

高良さんは少し何故名前を知っているのか驚いたあと、笑顔で「ありがとうございます。」と応え生徒手帳を受け取った。

「それでは失礼します。」

「あ、ありがとう。」

「こちらこそ。」

そう笑顔で言い残し高良さんはさつき声がした方へ歩いて行った。剣輔はといえばぎこちない笑顔を浮かべていただけだった。

高良さんに教えてもらった職員室への行き道を利用しすんなり到着することができた。

「失礼します。今日転入予定の平沢剣輔です。えつと黒井先生お願いします。」

入学の手続きなど電話で説明を受けた時の担当の先生の名前だ。

「おーおー転校生!!。」と黒井先生は剣輔ににじり寄り、

「今日からよろしくな。ウチがアンタのクラスの担任の黒井や。そんじゃ早速行くか。」

「あ、はい。」

剣輔は黒井先生につられるように職員室をあとにする。

「アンタ、愛知から来たんやっただな。遠かったやろ?」

「あ、いえ祖父母の家がここにあるので一応お盆に来てましたし、慣れてます。」

「そうか。んで?センセイにお土産とかない?!!」

「そうですね。あ、いろいろありました。」

「おーおーいろいろか。大須のか?」

「そうですね。」

「ほな、また頼むな。」

「あ、はい。」

このやりとりで大方黒井先生の性格がわかった気がする。

「先生、先生はもう結婚とかされてるんですか？」

「結婚？なんやそれ。食えんのか？そりやウチだっているいろいろあるや。したくても出来ないし、かといってお見合いもなんだしなー、

……。」

どうやら地雷を踏んでしまったらしい。

黒井先生はしゃべる口を止めない。しかもうつすら涙目だ。

「先生、やっぱり俺が悪かったす。ういる明日持つて行きます。」

「ウチやつてな、ウチやつてなー！！」

黒井ななこの悲痛な叫びとHRを告げるチャイムが校舎に響く……。

それから十分、なんとか黒井先生をなだめることに成功した剣輔は黒井先生と

214 とかかれたプレートの付いた教室の前に着いた。そして黒

井先生がドアを開け放ちながら、

「遅れてすまんかったなー、二日連続で悪い。そんで今日は転校生を紹介するでー。」

（話つながってねーっ！しかも唐突すぎるーっ！）

この時、二年四組の生徒は新学期から二日目にして早くも心が繋がった。

「ほら、入りや。」

おおっという声と、チツという音が混ざりあう。

（まさか、転校生は美少女しかありえないとでも思っている輩がまだいるのか！？いや実際俺もだけど、こうやって舌打ちされるとな
あ）

「ほな自己紹介から行こうか。」

黒井先生の一言で現実に戻される。

そして、朝考えた文をそのまま言うつもりだったが、第一声の僕の”ぼ”の前で切れてしまった。それは見つけたからだ。朝出会った

彼女を。

「どうした??」

先生の言葉で我に返り、そのまま”僕”から言葉を続けた。

「ほな平沢の席は、一番後ろ、空いてるな。泉の後ろや。」

黒井先生に指定された場所は一番後ろ列から机がぴよこんと飛び出たところだった。

「ほな、ちよつと遅れたけど授業始めるで。」

そこで、高良さんが号令をかけた。

すると、自然とそちらに目が行ってしまうのも男の性なのだが、なぜか後ろを向いた高良さんと目があってしまった。

もちろん高良さんはスマイルだ。不覚にも目を反らしてしまい、それから視線が合うことはなかった。

「平沢、アンタ教科書もつとるか?」

「あ、はい。大丈夫です。」

「ほな始めるで。それじゃ教科書の十四ページから……。」

「泉、この『黄巾の乱』のボスは誰や?」

黒井先生が剣輔の前の席の女生徒をあてる。しかし先程から頭を机にぶつけていた彼女は夢の中らしく、先生の声がまるで聞こえていない。

「泉ー!」

先生が青筋を立てて泉さんに近寄る。

もうここからはお約束だ。

ゴンッっ!!

見てるこちらにも痛くなりそうなげんこつだ。

「~~~~~」

泉さんが声を殺してうなっている。

「せんせ」

「なんや泉？文句があるなら言ーてみ。」

「昨日は徹夜しちゃって……」

「新学期そうそう徹夜かぁ？。」

「はい」

「ウチの授業は最初から寝るつもりやったんやな？？、ん？」

「うつ……」

黒井先生に言いくるめられた泉さんが青くなっていて、周りからクスクスと小さな笑い声が聞こえてくる。

「それじゃ泉、さっきの問題答えてや。」

「せんせい！ここは転入の歓迎として転校生にパスします！！」いきなり話を振られた！

もちろん教科書を見れば答えなどすぐにわかるのだが、どうやら泉さんの夢の中では世界史は展開されていなかったようだ。

「泉」

黒井先生の額にまたも青筋らしきものが……

このままでは正直あれなのでここは泉さんのパスに応えようと思う。

「あの、先生多分『張角』だと思います。」

一気に教室が静まりかえる。

一瞬の沈黙ののち黒井先生はあきらめたように、

「そうやったな。うん、よし、次行こか。」

何事もなかったか如く授業を再開させた。

授業後、泉さんが振り返り、

「いや、転校生助かったよ。」

よく見ると泉さんはすごく小柄で中学生、下手すれば小学生には見えないか。

とにかく小さいのだ。あらゆるところが。

「ムッ転校生さん、まさか私見て変なこと考えてる？？」

まるで心の中を見透かしているような言いようで戸惑ってしまう。

「そ、そんな滅相もない。」

「ならいいけどね。」

「泉さん、と平沢さん、でしたね。」

泉さんと話していると、思ってもいない人物が登場した。

「あつ高良さん！朝の時はありがとう。」

「いえいえ。」

「あれ？？ゆきちゃん転校生さんと知り合いだったの？！」

高良さんと、……ショートカットで大きめなりボンをした大人しそうな子だった。

「あの、平沢さんは、は朝私に生徒手帳を届けてくださったので、その時に。」

「このドジっ娘め！？」

泉さんの言うことに間違いはないのだが……はたしてここは肯定しても良いのだろうか……。

「あ、あのそっちの人は……。」

「あ、そういえば自己紹介まだだったね。私は柊つかさだよ。よろしくね！」

「よ、よろしく柊さん。」

「こちらこそ。」

「あと一人、いるのだよ、転校生。」

泉さんがなんかのセリフっぽく呟く。

「そういえば、かがみさんまだ来てませんですね。」

「そうだね。まあ次の放課にはくるよね？」

ここで、かがみさんについて聞こうと思った矢先、次の担当の先生が入ってきたことにより流されてしまった。

それからの授業については、泉さんが寝ては怒られ、寝ては怒られ……のスパイラルだった。

四時間目の授業が終わりクラスのみんながそれぞれの目的のために動き出す。

すると、泉さんが一緒に食べよう。と誘ってきてくれたわけで、なんとか一人飯は避けられた剣輔だったが、やはり女子に囲まれると

どうも落ち着かない若干十六歳の男であつた。

「おーっす。」

剣輔含む四人で机をくつつけていると、どこかで聞いたような声が聞こえた。

「あ、かがみん。」

「かがみんゆーな！」

「えっとこの人がさっき言つてた……」

「はい、かがみさんです。」

「この人私の双子のお姉ちゃんなんだよ?。」

「あ、そう言われて見ると似てる気もするな。」

「で、みゆきこちらの人は?」

「転校生だよー。」

「それはわかつてるわ!!」

どうやら泉さんがボケで柊さん?はツツコミのようだ。

「そういえば双子、なんだっけ?二人は。」

「そうよ?」「そうだね。」

「じゃあどっちも、柊さん?」

「あ、なら私のことはかがみ、で言いから。」

「私もつかさで大丈夫だよ?。」

「じゃ、じゃあよろしく、かがみさん、つかささん。」

「「こちらこそ。」」

どうやらすごいことが起きてしまったらしい。前の学校ではまるで女子とは縁がなかった俺が転入早々女の子の友達を作れるなんて…。そんな喜びと一緒に自前の弁当をかじる剣輔であつた。

それからのことを話すと、泉さんが昼食を腹に落としたためか睡眠、もとい居眠りに拍車がかかり先生も呆れていた。

そしてようやく六時間目の授業に終わりを告げるチャイムが鳴った。高良さんが号令をかけ、あとはHRで放課後だ。

「転校生、このあと用事でもある?」

「んー引っ越しの片付けは大体終わってるし、部活も今更入る気ないし…多分大丈夫だよ。」

「それじゃあ転校生、このあとゲームズ行かないかい?。」

正直、魅力的なお誘いだった。あくまでも剣輔にとっては、だが。

「あ、行く行く!。」

「あれ?もしかして転校生さん、アナタもこっちの人間ですか?!」

「無難に答えるなら、そうだな。」

「それなら話は早いね!。」

「そうだな。」

剣輔と泉との間に親近感、仲間意識が生まれたのは言うまでもない。

そんなことを話しているいつもの四人が集まってきた。

「かがみん、今日転校生も連れてゲームズ行こーよ。」

「かがみんゆーな!!私はこのあと家帰って部屋片付けなくちゃなの!。」

「なんだよー。じゃあつかさは?みゆきさんは?」

「すいません、私も今日は…。」「同じく」

「なんだよなんだよ!もういいよ!行こ、剣ちゃん!。」

「あ、ああ」

そのまま泉は剣輔を引きずるように、と言っても背丈の違いから引っ張っているだけだが、二人は教室を後にした。

「なんかこなた、急にはしゃいじゃって。」

「そうですね。」

「ごめん、お姉ちゃん私先に帰るね?、ばいばいゆきちゃん。」

「あ、うん。」「さようなら。」

「それじゃあ私たちも帰るか。」「そうですね。」

大宮駅にて

「へーこんなところにあっただ。」

剣輔が感心していると、

「ほら剣ちゃん、行こうよ。」

「なあ何で剣ちゃんなんだ？」

「あれ？剣ちゃん知らない？食霊って漫画。その主人公の名前と一緒だし、ヒロインもそうやって呼んでるし。」

「あゝあれね。そういえばそうか。了解したよ。」

「俺あの漫画結構好きだったな。」

「そうなんだ。」

そんなたわいもない雑談をしながらゲームズに入店する。

「私、ちよつと買ってくるね。」

そう言つて泉は奥のコーナーへと進んでいった。剣ちゃんこと剣輔は場所を覚えるためだけに来ていたので特に何か買う予定もなく、店内をぶらついていた。

客の数は結構多い。この人のなかであの小さい背丈の少女を見つけることが出来るか不安だった剣輔は店の外で待つことにした。

三十分後

「あれ、剣ちゃん外にいたの。」

入り口のドアには両手に紙袋をもつた泉さんの姿。

どうやら店内を探してくれてたみたいだ。

「ごめん。店の中にいると見つけ難いかなと思って。」

「いいよいいよ。こっちこそごめんね。待たせちゃって。」

「気にしないでよ。」

「じゃあそうするね。」

「あつ剣ちゃん、このあとまだ大丈夫？」

「んーもうこんな時間か」

時刻は六時前を示している。

今家に帰つても七時を回つてしまつだろう。まあ家には誰もいないのだが。

「どこに寄りたいた？」

「えーと、もう時間もあれだしアニメイトに行けばいいかなあ。」

「じゃあメイト行つて終わりにするか？」

「そうだね。」しかし…

それからというものの、結局泉さんに付き合わされてゲームセンターやらなんやらに行き、結局帰つてくると八時半で、部活をしていてもあまり変わらないのでは、と思わなくもない剣輔。

そして緊張して疲れきつた身体を動かし、簡単な夕食を作り、風呂に入り、宿題を片付けてそのまま布団に倒れ込むように横になるが、あることを思い出し、仏壇のある和室へと足をはこんだ。

「じいちゃん、ばあちゃんもう友達が出来たよ。明日も学校楽しみだぜ。おやすみ。」

いつもの日課を済ませ、再び布団に入るが、なかなか寝付けない。あれだけ疲れていたのに。

その原因は少なからずあの四人のことでもあるが、そんなことに気づく剣輔ではなかった。

そして今宵も、夜は更ける。

四月十一日 前編

平沢剣輔の朝は早い。しかし、この朝は違った……。

「遅刻だーっつー!!」

現在時刻は七時三十分。彼の乗る電車は七時三十三分発の急行なので、今から家を出ても確実に間に合わない。

剣輔自身も昨夜あまり寝付きは良くなかったのだが、ここまでたっぷりと寝過ごしたことは過去、全くと言っていいほどなかった。家は彼一人なので、炊事洗濯は彼しか出来ない。しかしそれを行っている時間はなく、剣輔はロクに準備もせず家を飛び出した。もちろん鍵はかけていったが。

駅を出た時にはすでに八時三十分を優に過ぎていた。朝のHRは八時四十分からなのでもう遅刻は確定だ。

そんな遅刻の決まった剣輔は放心状態で歩いていると、後ろからすごいスピードで彼を抜こうとする小さい影があった。

「剣ちゃん?!」

しかし、その影は前を歩く人物を誰だか特定した直後、急にブレーキをかけたのだ。

つまるところスピードを出して動いている物体は、急には止まれない。てなわけで、不運にも前を歩く剣輔の背中に突っ込む形となってしまった訳で。

しかも丁度、名前を呼ばれた拍子に振り返った剣輔はその小さい影と正面から向かい合う形にもなった訳で。

その後は地球上の物理法則に従い、二人はぶつかった。

「いったゝゝ。」

「いつてえ。」

突然名前を呼ばれ、振り返った途端背中が地面とごっつんこ、だ。もちろんいい気分では決してない。この時ほど、泣きっ面に蜂の諺がすごく的を射ているのを真剣に感心してしまった剣輔だった。

「あれ？、泉さん！？」

「うーん、あ、おはよう剣ちゃん！」

「あの、悪いけど早く降りてくれないかな？」

はたから見れば見るほど何か疑わざるをえない体勢と時間的に本気で困った剣輔は冷や汗交じりに問う。

しかし泉は意地悪に笑うと、

「もうちょつとだけ、ここにいてもいい…？」

しかも上目遣いで。

これには苦笑いを浮かべるしかない剣輔だったが、泉は何かを思い出したように立ち上がると、

「そういえば！、剣ちゃん！時間は？！」

「えっと…七時三十六分？」

「よし！まだ間に合うよ剣ちゃん！！行こ！！！」

「えっ、間に合うって、ちょっ…」

剣輔の言葉を待たずに泉は彼の手をしっかりと掴み、その場から駆け出した。

小中高と今まで運動をやってきた剣輔でさえ、泉の足の速さについていくので精一杯だった。

そんな調子で柄にもない全力疾走のおかげか、

「泉いー！……はおらんか。」

「います！います！」

「あ、俺もいます！」

「なんや、二人ともぎりぎりやな。まあええわ、はよ席に着き。」

どうやら間に合ったようだ。

そして席に向かおうと足を教室に踏み入れた時、

「なんや？お前ら。朝から手ー繋いで。なんかあったんか？？」

黒井先生の一言で今までずっと手をつないでいたことに気づく二人。泉は少し頬を赤くして、「遅刻ぎりぎりだったんで、一緒に走ってきたんですよ。」

「ま、いつものことやからな。ほれ、はよ席に着きや。」

「はい。ほら剣ちゃん？」

女の子と手をつないだことなど、数えるほどもなかった彼はこの高校に入学してからもう何度もお世話になっているお花畑から泉の一言で戻ってくる。

「あ、ああ。」

「ほなこれで終わりや。」

ほどなくしてHRが終了する。

「おはようございます。」「おはよー。」

高良さんとかささんだ。

ここでいつもの三人と簡単なおしゃべりをし、剣輔は、そろそろ男の友達を作ろうかと考えていた。

1時限目の授業は昨日と同様、世界史だ。

剣輔が教科書とノートをかばんから取り出そうとする。しかし、見たたらなかった。

朝ろくに準備もせず出てきてしまったので、教科書が入っていないかった。

隣がないので見せてもらうことは無理そうだ。

そんなあたふたしている剣輔をみた泉が

「剣ちゃん、どうかしたの？」

「いや、今日は寝坊しちゃって世界史の教科書忘れちゃったんだよね。」

「それならかがみんなに借りてくればいいじゃん。多分かがみんなのクラスも今日日本史あったはずだよ。」

剣輔は転入二日でいきなり他クラスに知り合いがいる、という訳のわからないアドバンテージを持っている。それを利用しない訳にはいなかった。

「それじゃ急いで借りてくるよ！！かがみさんって隣のクラスだったよね？」

「そうだよ」

急いで教室を飛び出す。

「かがみさん！！」

かがみさんに聞こえるように大声で叫ぶ。

「誰よーもう大きな声で！」

ってあれ？、剣輔くんじゃない。どうしたの??」

「あ、かがみさん！えっと実は……。」

「はあ、そうゆうことね。全くこなたといいアンタまで……とは……。」

どうやら呆れられてしまったみたいだ。

しかし弁明してる暇はない！！

だがこれも世界史のためだ！、と女子の評価よりも授業をとってしまふかわいそうな剣輔であった。

「とにかく、お願いします！！」

「しょうがないわね。ちょっと待ってなさい。」

世界史の教科書を手渡される。

「ありがとう！」

「高くつくわよ??」

意地悪っぽく微笑む顔に、またも戸惑ってしまう。

「わ、わかったよ。とりあえずサンキューな。」

そう言っつて、クラスを後にする。

「ぎりぎりセーフ！」

なんとか授業前に席に着くことができた。

「お帰りー、それじゃ私も……。アラッ!？」

泉さんが残念な声を上げる。

「どうした??」

その時丁度黒井先生の、「ほな授業はじめるでー。」の言葉で授業

が始まった。

泉さんといえば、いかにもテヘツな感じで笑い、
「私も教科書忘れちゃった」と。

四月十一日 後編

「私も教科書忘れちゃった」

泉さんはこちらを振り向き、テレッツな感じで言った。

「ほお、泉、昨日も授業あつたのに忘れたんか」。

黒井先生が青筋を立てて睨ん…、笑っている。

「いや、あの……これはその……。」

まさか聞かれているとは思ってもいなかった泉さんはまた冷や汗をかいていた。正直自分もここまでくれば少しは学習するだろ?!と思わなくもなかった。

「泉、この1時間お前の席はここや!」

そう言つて、泉さんを教卓の横のスペース、別名VIP PLACE (キラッ) に連れていった。

こうなると、剣輔の席の前がぼっこり空いてしまふ形で、えもいえない違和感を残し、授業は始まった。

そして、剣輔はここでも泉の大胆不敵? な一面を垣間見た……。

よーするに、寝ているのだ。

VIP ^{キラッ} PLACEで。

当然先生の容赦ない肅清がくだるのだが、そんなのお構いなしに眠っている。

ここにきて黒井先生は怒りを通り越して、呆れてしまっていた。

当たり前だが、げんこつは忘れていない。

そして、授業後泉さんは午前の授業はすべてそこで受ける。と判決を受けていた。

まあ当然のことだったが。

そして長かった(おそらく泉さんにとっては)午前の授業はチャイムと共に終わりを告げ、クラス内を静かな喧噪がつつみこむ。

「やっと帰ってこれた〜。」

「お疲れ様です。」「お疲れ〜。」

「おう、お疲れ。」「三者三様のいたわりの言葉だ。

「おーっす。」

かがみさんもここにきて登場してきた。

「それじゃ、いただきます。」

もともとお腹が減っていた剣輔は早速、自前の弁当（遅刻したので手抜きではあるが、）を消化しにかかる。

それを見ていた四人は、

「剣輔くんって自分でお弁当とか作ってるの??」と、つかささん

「あーそれ少し気になるわ。なんか私のより綺麗かも……。」「と、かがみさん

「この卵焼き、頂戴!。」と、泉さん。

「あら、おいしそうですね。」「と高良さん。

もちろん家には誰もいないから、必然的に自分が弁当を作らなければならない。

「今日寝坊しちゃったから手抜き感満載だけど、ちゃんと自分で作ってるよ。」

「手抜きには見えないわね……。」

「本当にお上手なんですね。」

「あ、ありがとう。」

少し照れて赤くなってしまうた剣輔だが、誰でもそんな気持ちにはなってしまうのだ。

「卵焼き〜!!」

さつきから駄々をこねている泉さんの口に卵焼きをつっこんで黙らせ、会話を続ける。

「やっぱり女の子って料理できるのんだよね??、つかささんなんて俺のより全然上手だよ。」

「そんなことないよー。」

「つかさちよつと赤くなってる。」

「えっええー！」

かがみさんの茶々も入りますます顔を赤くするつかささん。多分俺でも赤くなつてたと思う。

「かがみさんのは……あれだね？のり弁当かな？？」

そうとしか表現出来なかった。

だつてご飯の部分が海苔で覆われていて、隅っこに小さな漬物が添えられているだけなのだから。

「ふっ、どうせ私なんか……。」

ぶつぶつと自虐モードに入ってしまったかがみさん。当事者だが、今の俺にはこちらに戻せる自信が、あまりない。

「あのかがみさん、この漬物おいしいですね？」

そこに高良さんが助け船をだす。

「いつもお姉ちゃんに料理教えてるんだけどね？。」

つかささんも困った顔で言う。

「かがみん、料理は見た目、味じゃなくて、愛、愛だよー！！」

泉さんがすごいキラキラした目で褒めて？いる。そりゃ愛も大事だと思うけど。

「かがみんゆーなー。」

泉さんの熱い言葉もどうやら届かなかったようだ。

そこで五限間目の始まりの予鈴がなった。

こちらとしては、どうにか機嫌を持ち直して欲しかったがそれも叶わずかがみさんはトボトボと自分の教室へと帰っていった。後で謝っておこう。

五、六時限目は前の席で眠そうな泉さんを必死で起こそうとして、終わった。

そして放課後。

剣輔は朝やって来れなかった分の家事を残しているので、今日は早く帰る予定なのだが……。

「剣ちゃん！！今日メイト行こっ！！！！」

「あ、私も昨日買いに行けなかったラノベの新刊買いたいから行く。」

「早速毎度の展開だ。」

「ゴメン、俺今日寝坊しちゃったから家のこと何にもやってないんだ。だから今日はちよと無理だな。」

「ちえ、じゃかがみん、行こっ！」

そうして泉さんは機嫌の直ったらしいかがみさんを昨日のように引っ張って行ってしまった。

「それじゃ、俺も帰ります。」

「うん、また明日ねー。」

「さようなら。」

二人と挨拶をし、一人家路についた。

帰り道、歩きながらふとあることが浮かんた。

（そういえば、まだ誰のアドレスとかも知らなかったんだっただ。明日にでもみんなに聞いて見るか。）

家に帰ってみると留守電が入っていた。

発信者は”母”となっている。

剣輔は急いでかけ直すが、時差を考え途中で受話器を降ろした。

四月十一日 後編（後書き）

これでいつもの四人と黒井先生のファーストコンタクト終了、と言ったところでしょうか。

ようやく次から本編が始められそうです。（汗）

キャラクターの細かい設定などは、これから本編でちよくちよく出して行きたいです。

もう少し話を練りたいので更新を遅らせていただきます。

申し訳ありません!!。

頑張って面白いものを作ってきます!!。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3766ba/>

らき すたSS ~ 普通が普通で普通じゃない~

2012年1月13日22時59分発行